

## 戦国 解説

1

1. 『徳川実紀』の東照宮御実紀の天正十八年の部分に「抑此城といふは。むかし鎌倉の管領上杉修理大夫定政第一の謀臣太田左衛門持資入道道灌が康。正二年縄張り長禄元年成功せし」とあり、これを根拠とする。また山吹伝説とは太田道灌が民家で蓑を求めた際、山吹の花を差し出され、その意味が理解できなかつたことを恥じ、歌道に励むようになったという逸話である。『江戸名所図会』に記載されているなど江戸時代から広く知られていたようである。

2. アの武田信勝は武田勝頼の息子であり、甲斐武田家最後の当主と考えられている。

イの海野信親は武田信玄の次男であり、盲目であったとされる。

ウの武田義信は正解の人物であり、親今川派として今川侵攻を目論む信玄と対立していたと考えられている。

エの武田信之は武田信玄の三男であり、夭折したとされるが異説も存在する。

3. アの花倉の乱は今川氏輝死後、玄広恵探と梅岳承芳（義元）が争った今川家におけるお家騒動。

イの天文の乱は伊達植宗・晴宗父子が争った伊達家のお家騒動。

ウの二階崩れの変は大友義鑑・義鎮（宗麟）父子が争った大友家のお家騒動。

エの御館の乱は正解で上杉景勝と上杉景虎が争った。

4. 御館の乱で敗れたのは上杉景虎。そして景虎の実父は北条氏康である。景虎は北条氏と上杉氏が同盟を結んだ際に人質として上杉謙信の養子となった。御館の乱では当初実家の北条氏などの支援を受けて優勢であったが、春日山城を景勝に奪われ、敗北した。

5. アの掛川城は正解。今川氏が遠江進出の足掛かりとして朝比奈氏に築かせた。後に山内一豊も城主を務めており、高知城築城の参考にしたともいわれる。

イの二俣城は天竜川と二俣川の合流地点に位置する城。交通の要衝であり、徳川軍と武田軍がこの城をめぐる衝突を繰り返した。また松平信康が切腹した場所としても有名である。

ウの高天神城は菊川近くにある城。浜ノ浦という港に近く、徳川軍と武田軍がこの城を奪い合った。

エの曳馬城は現在の元城町東照宮の近くに位置する城。1570年に岡崎城から移ってきた徳川家康により浜松城と名前を変え、大幅に拡張された。

6. アの真田昌輝は幸隆の次男。武田二十四将のひとりに数えられることもあり、長篠の戦

で討ち死にした。

イの真田信尹は正解。大阪の陣では家康に信繁の首実検を任されたが、判別できないと答えて不興を買ったという。

ウの真田信綱は幸隆の長男。幸隆の死後真田家の当主となった。昌輝同様、武田二十四将に数えられることもあり長篠の戦で討ち死にした。

エの真田昌幸は幸隆の三男。信綱の死後真田家の家督を継いだ。信繁の父で徳川家と二度にわたって争った上田合戦などが有名である。

7. 摺上原の戦いは佐竹・蘆名連合軍と伊達軍が猪苗代湖の北の摺上原で激突した戦い。猪苗代氏の寝返りなどもあり伊達軍が勝利した。この結果蘆名義広は追放され、佐竹氏の東北への影響力は失われた。

8. アの大浦為信は津軽為信とも呼ばれる戦国大名。当初南部家の家臣であったが謀反を起こし独立に成功。その後津軽地方を制圧していった。

イの九戸政実(正解)は南部晴政死後の後継者問題で南部信直と対立し、後に九戸政実の乱を起こしたが秀吉の支援を受けた信直の勢力に敗れ斬首された。

ウの石川高信は南部家の重臣。津軽為信の奇襲により敗死したとされるが、南部家側の文献では生き延びていたとするものもあり、あまりはっきりしない。

エの南部晴政は南部家当主。南部信直の養父であり、嫡男の晴継が生まれた後は信直と対立した。

## 2

1. 『後法成寺関白記』は京都の公家近衛尚通が著した漢文日記である。永正6年(1506)から天文5年(1536)までの出来事が記されている。近衛尚通が冷泉政為・為孝父子と酒を酌み交わした記録も残されている。

2. 大永8年(1528)に朝廷によって大永から享禄への改元が行われた。

3. 享禄3年(1530)当時、和泉国堺の足利義維と近江国朽木の足利義晴はいずれも「大樹」(将軍を指す称号)と呼ばれていた。享禄3年正月、大外記清原業賢、大内記五城為康、武家伝奏広橋兼秀の3人は足利義晴昇進の宣旨を下すために勅使として京から朽木に下向し、公家の烏丸光康の取次によって義晴と対面した。

4. 九鬼嘉隆は慶長5年(1600)の関ヶ原合戦に際し西軍に所属し、東軍の嫡男・守隆と戦った。西軍の敗戦後、嘉隆は娘婿の紀伊新宮城主堀内氏善を頼ったが、氏善が既に降伏していたために新宮城に入れず、答志島に潜伏した。10月12日、嘉隆は家臣の豊田五郎右衛門

の勧めで自刃した。守隆が父の助命嘆願に成功した後のことであったため、豊田五郎右衛門は守隆によって極刑に処された。

5. 冷泉為純は藤原定家を祖とする下冷泉家の出身である。為純の曾祖父政為や祖父為孝、父為豊は、荘園を管理するために頻繁に家領の播磨国三木郡細川荘に下向していた。為純は細川荘で生活する一方、天正4年(1576)には従三位に叙され、翌年には参議に任じられていた。しかし、天正6年(1578)に細川荘近隣の三木城主・別所長治が織田信長を裏切り、細川荘は別所氏の攻撃を受けた。為純と長男・為勝は4月1日に戦死したが、三男の藤原惺窩は生き残り、京都相国寺に入り儒学を学んだ。

6. 吉川元春は羽柴秀吉に包囲された鳥取城救援のため、天正9年(1581)10月25日に伯耆国馬ノ山に着陣した。鳥取城を落とした後、西進した秀吉は南条元統が籠る伯耆国羽衣城近辺に着陣し、元春と対峙した。7日間の対陣の後、秀吉は羽衣城に兵糧・弾薬を配備すると11月8日に姫路に帰還した。

7. 谷忠澄と江村親俊は阿波国一宮城を守備したが、一宮城は羽柴秀長に攻められ落城した。

8. 伊東祐慶は慶長5年(1600)の関ヶ原合戦に際し東軍に属し、稲津重政に日向縣城主・高橋元種の属城である宮崎城を攻めさせ、9月29日に落城させた。しかし、元種自身は大垣城で東軍に帰順していたため、翌年に祐慶は宮崎城を元種に返還するよう求められた。祐慶は稲津重政に責任を押し付け、切腹を命じた。重政は拒否し居城の清武城に籠城したが、祐慶に攻められ自刃した。

#### 参考文献

太田牛一著・桑名忠親校注(1997)『新訂 信長公記』新人物往来社

小和田泰経(2014)『関ヶ原合戦公式本』学研

東京大学史料編纂所(2007)『大日本古記録 後法成寺關白記(三)』岩波書店

渡邊大門(2011)『逃げる公家、媚びる公家：戦国時代の貧しい貴族たち』柏書房

### 3

1 「戦国の七雄」は秦、魏、斉、楚、韓、燕、趙の七か国を指すため、選択肢の韓が答えである。

2、『韓非子』の「姦劫弑臣」より「是を以て度数の言、前に効すを得ば、則ち賞罰必ず後

に用いられる。」意味は「そこで、まず法則にかなった進言が許されれば、そのあとでは必ず賞罰が行われることになる。」これは諸子百家の韓非子の信賞必罰の理念であるため『韓非子』が正しい。

3、韓（紀元前 230 年）、趙（紀元前 228 年）、魏（紀元前 225 年）、楚（紀元前 223 年）、燕（紀元前 222 年）、齊（紀元前 221 年）の順で始皇帝が併合または滅亡させた。よって滅亡の順は趙→魏→燕→齊の順番である。

4、齊の首都臨淄は中華人民共和国の山東省淄博市にあたる。紀元前 284 年に燕、秦、趙、魏、韓の連合軍により一時首都が陥落するも、紀元前 279 年に田単が燕を倒して襄王を臨淄に迎えて領土を回復した。

5、正解は『墨子』である。「非攻」において専守防衛以外の戦争を否定し、「非儒」において儒学の天命思想を批判している。「節用」は王族から農民まで質素な生活を送ることを説き、「尚賢」において身分にとらわれない人材登用が説かれている。

6、正解はウの孝公である。商鞅は改革において民の戸籍を作成し、五戸または十戸ごとにまとめて互いを監視させた。また社会に法令を適用したことで、著作を法家の祖とされ、秦をはじめとする後世の国家に影響を与えた。

7 正解はア 楽乗ではなく燕の武将の楽毅が『史記』列伝卷八十に入っている。縦横家の蘇秦は『史記』卷六十九、楚の政治家の春申君は卷七十八、齊の宰相を務めた孟嘗君は同書卷七十五に収録されている。

8、『史記』刺客列伝において「風蕭蕭兮易水寒 壯士一去兮不復還」が始皇帝暗殺決行前に詠んだ歌であるためエが正解である。アは杜甫の「春眠暁不覚」、イは項羽が楚漢戦争の際に歌った通称「垓下の歌」、ウは曹操の「歩出夏門行」である。